

# 立正観抄送状

文永一二年二月二八日 五四歳

今度の御使ひ誠に御志の程頭はれ候ひ了んぬ。又種々の御志慥かに給ひ候ひ了んぬ。  
抑そもそも承り候当世の天台宗等、止観しかんは法華經に勝れ禅宗は止観に勝る、又観心かんじんの大教興おこ  
る時は本迹ほんじゃくの大教を捨つと云ふ事。先づ天台一宗に於て流々各別なりと雖も、慧心・  
檀那だんなの両流を出でず候なり。慧心流の義に云はく、止観の一部は本迹二門わたに亘るなり。謂い  
はく、止観の六に云はく「観は仏知に名づけ、止は仏見むすに名づく。念々の中に於て止観  
現前す。乃至三乗さんじゅうの近執くけつを除く」文。弘決の五に云はく「十法これ既に是法華しよじょうの所乘なり。  
是の故に還つて法華の文を用ひて歎ず。若し迹に約して説かば、即ち大通智勝だいつう ちしよぶつ仏の時  
を指して以て積劫しゃっこうと為し、寂滅じゃくめつ道場を以て妙悟と為す。若し本門ほんもんに約せば、我本行がほんぎょう  
菩薩道ぼさつどうの時を指して以て積劫と為し、本成仏の時を以て妙悟と為す。本迹二門ただこれは只是此  
の十法を求悟くごす」文。始めの一文は本門に限ると見えたり。次の文は正しく本迹に亘る  
と見えたり。止観は本迹に亘ると云ふ事、文証これ此に依るなりと云へり。次に檀那流に止  
観は迹門に限ると云ふ証拠は、弘決の三に云はく「還つて教味を借りて以て妙円を顯は  
す。故に知んぬ、一部の文共に円乗えんじょうの開権かいこん妙観みょうかんを成ず」文。此の文に依らば、止観は  
法華の迹門に限ると云ふ事、文に在つて分明なり。両流の異義替はれども俱ともに本迹を出  
でず。当世の天台宗何くより相承して止観は法華經に勝ると云ふや。但予が所存は止観  
・法華の勝劣は天地雲泥なり。若し与へて之を論ぜば止観は法華迹門ぶんざいの分齊に似たり。  
其の故は天台大師の己証こじょうとは、十徳の中の第一は自解じげ仏乗ぶつじょう、第九は玄悟げんご法華ほつ円意えんいなり。  
靈応伝れいおうでんの第四に云はく「法華の行を受けて二七日にしち境界きょうがいす」文。止観の一に云はく「此  
の止観は天台智者、己心中所行の法門を説く」文。弘決の五に云はく「故に止観まさの正し  
く観法を明かすに至つて、並びに三千を以て指南と為す。故に序の中に云はく、説己心せつこしん  
中所行ちゅうしよぎょうほうもん法門」文。己心所行の法門とは一念三千・一心三観さんがんなり。三諦止観みょうぎの名義ようらくは瓔珞  
・仁王にんのうの二經に有りと雖も、一心三観・一念三千等の己心所行の法門をば、迹門の十如  
実相の文を依文として釈成し給ひ了んぬ。爰ここに知んぬ、止観一部は迹門の分齊に似たり  
と云ふ事を。若し奪つて之を論ぜば、爾前・権大乘は即ち別教の分齊なり。其の故は天  
台己証の止観とは道場所得の妙悟なり。所謂天台大師、大蘇だいその普賢道場ふげんに於て三昧さんまいを開発  
し、証を以て師もうに白す。師の曰く、法華の前方ぜんほう便陀羅尼べんたらになりと。靈応伝の第四に云はく  
「智顛ちぎ、師に代はつて金字こんじきょう經を講ず。一心具足くそく万行の処に至つて、顛ぎ、疑ひ有り。思し、

為に釈して曰く、汝が疑ふ所は此乃ち大品次第の意なるのみ。未だ是法華円頓の旨に  
あらざるなり」文。講ずる所の經、既に権大乘經なり。又「次第」と云へり、故に別教  
なり。開發せし陀羅尼、又法華の前方便と云へり。故に知んぬ、爾前帶權の經は別教の  
分齊なりと云ふ事を。己証既に前方便の陀羅尼なり。止觀とは「説己心中所行法門」  
と云ふが故に。明らかに知んぬ、法華の迹門に及ばずと云ふ事を。何に況んや本門をや。  
若し此の意を得ば檀那流の義尤も吉きなり。

此等の趣きを以て止觀は法華に勝ると申す邪義をば問答有るべく候か。委細の旨は  
別に一卷書き進らせ候なり。又日蓮相承の法門血脈、慥かに之を註し奉る。恐々謹言。

二月二十八日

日蓮花押

最蓮房御返事